といふ、實に富士の形に似たり、海邊の俗語にて秘とする事、あながちあらざれども、歌客京に居り、遠海の事にうとく、時さりてしる人なく、偶につたへしもの、秘して是を傳へしにこそ、

〔倭訓栞前編十一〕しほじり　伊勢物語に、不二の山の事を、なりはしほじりのやうにてと書り、海人の潮たるゝ、砂をたれはてゝ、後、うちこぼしたるを鹽尻といふ、今もいふ詞、鹵坵也といへり、一說に融の大臣、ちかの鹽がまを、六條河原にうつし、難波の鹽をくませて、鹽を燒たりしより、京家の人のめづらしがりて、其鹽尻のかたを燒物にして、火桶に用ゐたるをも、同じく鹽尻といふを、こゝに指てたとへばといへりとぞ、

〔伊勢物語下〕むかし左のおほいまうち君、融○源いまそかりけり、かも川の邊に、六條わたりに家をいと面白く作りて住給ひけり、神無月のつごもりがたに、菊の花うつろひさかり成に、紅葉のちくさに見ゆるおり、みこたちおはしまさせて、夜一よ酒のみしあそびて、夜明もて行ほどに、此殿のおもしろきを、ほむる歌よむ、そこに立けるかたゐおきな、板敷のしたにはいありきて、人にみなよませはてゝ、讀る、

鹽がまにいつかきにけん朝なぎにつりする舟は爰によらなん、と讀けるは、みちの國にいきたりけるに、あやしく面白き所々おほかりけり、わがみかど六十よこくの中に、鹽がまといふ所に、にたる所なかりけり、さればなんかの翁さらに爰をめでゝ、鹽がまにつきにけんと讀りける、

〔今昔物語二十七〕川原院融左大臣靈宇陁院見給語第二

今昔、川原ノ院ハ、融ノ左大臣ノ造テ住給ケル家ナリ、陸奥ノ國ノ鹽竈ノ形ヲ造テ、潮ノ水ヲ汲入テ池ニ湛ヘタリケリ、○中略其ノ子孫ニテ有ケル人ノ、宇陁ノ院ニ奉タリケル也、

〔今昔物語二十四〕於河原院歌讀共來讀和歌語第四十六

今昔、河原院ニ宇多院住マセ給ケルニ、失サセ給ヒケレバ、住ム人モ无クテ、院ノ內荒タリケルヲ、

鹽釜